

オリンピックに見るスポーツプロパガンダ利用に関する一考察

～ベルリンオリンピックに着目して～

A Study on the Utilization of the Olympic Games as Sports Propaganda

～ Focusing on Berlin Olympic ～

1K06B509

西垣 強司

指導教員 主査 友添 秀則 先生

副査 宮内 孝知 先生

【研究の動機】『戦争広告代理店』という一冊の本により、あのボスニア紛争の裏には、アメリカの PR 会社関わっているという衝撃的事実を知った。戦争という善悪二元論では割り切れない問題にもかかわらず、モスLEM人を善、セルビア人を悪というイメージを巧みなメディア戦略によって世界中に植え付け、セルビアを批判の対象に追いやったのだ。これは、アメリカの PR 会社が仕掛けたプロパガンダ戦略によるものであるが、このような世論を煽動する手法は、スポーツの場にも同様に行われているのではないかと思い、興味を持った。かつて、ヒトラー率いるナチスが、オリンピックをユダヤ人迫害の事実から世界の目を逸らせ、ドイツの優位性を示すためにプロパガンダに利用してから現在に至るまで、オリンピックはプロパガンダに利用され続けているように感じる。今回、私はベルリンオリンピックにおけるスポーツのプロパガンダ利用の事例に着目して、その是非を問いたいと思い、これをテーマとした。

【目的】ベルリンオリンピックのプロパガンダ利用の事例に焦点を当て研究する。ナチスがオリンピックのプロパガンダ利用に至った歴史的経緯を振り返り、最終的には、スポーツがプロパガンダに利用されることは果たして良いことなのか、そして、オリンピックの本来あるべき姿について言及していく。

【研究の方法】本研究は文献資料を基に研究をする。第1章では、ナチスとベルリンオリンピックの関係を示すために、ベルリンオリンピックが開催されるまでの経緯を、文献資料を基に研究する。第2章では、ベルリンオリンピックにおけるプロパガンダ戦略の具体例を、文献資料を基に研究する。第3章では、ベルリンオリンピックでのプロパガンダが社会に与えた影響を、第1章と第2章を踏まえ、文献資料を用いながら検証する。また、プロパガンダに使われたものの、スポーツイベントとしては成功したのかについても言及していく。結章では、を本研究のまとめをして、今後の課題と展望について言及していく。

【各章の概要】序章では、本研究のテーマを選択した動機、目的を述べ方法、用語の説明をする。第1章では、ベルリンオリンピックが開催されるまでの経緯を、ディームとレーヴァルトが行ったオリンピック招致活動から、ナチスがオリンピックに目を付けた経緯を述べ、さらに、ベルリンオリンピック最大の障ガンダからの視点とスポー害になった国際的ボイコットと、ガルミッシュ大会の成功までの話を述べる。第2章ではナチスがどのようにオリンピックをプロパガンダに利用したか、徹底した準備と視覚への瞞着戦略や、国内外の宣伝活動、さらには、開会式とリーフェンシュタールが監督を務めた映画「オリンピア」とそれぞれに着目して言及する。そして第3章で、ベルリンオリンピック

が社会に与えた影響を、プロパティメントとしての視点から検証する。結章で、本研究のまとめと、今後の課題と展望について述べる。